

## バンコク日本人学校における特別支援教育の実践

前泰日協会学校バンコク校 (バンコク日本人学校) 教諭

神奈川県横浜市立日下小学校 主幹教諭 水谷 拓也

キーワード 在外教育施設、バンコク、特別支援教育

赴任校の概要 (2024年4月現在)

学校名・日本語: 泰日協会学校バンコク校 (バンコク日本人学校)

学校名・現地表記: THAI JAPANESE ASSOCIATION SCHOOL (โรงเรียนสมาคมไทย-ญี่ปุ่น)

URL: <https://www.tjas.ac.th/>

児童生徒数 小学部 1744人 中学部 426人

### 1 はじめに

私は横浜市で、10年以上に渡り、特別支援学級担任として特別支援教育に力を入れてきた。赴任が決まる数年前、当時バンコクに住んでいた姉から、海外で障がい児を育てることについて相談を受け、Webで調べていたところ、在外教育施設では、特別支援教育の専門性のある教員が不足しており、現場で求められていることを知った。そこで、自分の専門性や経験を、海外で暮らす配慮を要する子どもたちの支援に生かせればと思い、赴任希望を出し、2度目の挑戦でバンコク日本人学校への赴任が決まった。

バンコク日本人学校は、世界で一番規模の大きな在外教育施設であり、小学部には特別支援学級 (なかよし学級) が設置されていた。3年間の派遣期間のうち、1年目はなかよし学級担任 (コロナ禍のため半年間はオンライン授業)、2年目はなかよし学級主任、3年目は特別支援教育コーディネーターを担当した。派遣期間に実践した特別支援教育や、実践を通して感じたこと・考えたことなどについて、本記録にまとめたいと思う。

### 2 バンコク日本人学校における特別支援教育

#### (1) 特別支援学級 (なかよし学級) での実践

##### ① 小学部での特別支援学級の設置状況と施設環境

赴任した2021年度は、小学部に3学級の特別支援学級が設けられていた。担当教員は6名で、全員が特別支援学校の教員免許状取得者か特別支援学級での担任経験者であった。全員が特別支援教育についての専門性や経験を有しているというのはとても恵まれた環境だと感じた。ただし、教室サイズは小さく、1学級が通常学級の半分の大きさとなっていた。2人の担任が別の授業を同時に行うと、声が重なってしまうため、状況に応じて多目的教室や、日本語教室の空き教室などを借りて授業をすることもしばしばあった。また、中学部には特別支援学級が設置されていなかったため、小学部卒業と共に日本に帰国するケースがほとんどであった。父親の勤務が続く場合には、母子で帰国するケースもあり、高学年保護者からの中学部の特別支援学級設置への要望はとても大きかった。

② 特色のある授業内容（生活単元学習や総合学習での、日本とタイの文化的行事、日本との交流）

タイに住む子どもたちにとって、日本では当たり前の季節感を感じることは難しい。そこで、七夕や夏祭り、お月見、お正月などの日本の季節の行事を体験的に学べるような授業を意識的に計画して実施した。特に夏まつりでは、盆踊りをみんなで練習して踊ったり、的当てや金魚すくいなどのお店をグループで考えて出店したりした。当日はお祭りのお囃子BGMをかけながら、法被を着て活動し、日本の夏祭りの雰囲気存分に楽しむことができた。

一方、なかよし学級に在籍する児童は、環境の変化に弱いことが多く、日本から赴任してきた児童は、概してタイでの生活や文化の違いに否定的なことが多い。しかし、せっかくタイで暮らしているのだからタイの文化について知り、楽しんでもらいたいという思いで、タイの文化的行事についても体験的授業を行った。タイの旧正月（4月中旬）に行われる「ソンクラン」（水かけ祭り）を扱った際は、ソンクランの歴史について学んだあとで、校庭の芝の上に水をためたタライやバケツをたくさん用意して、水鉄砲やひしゃくをもって、水をかけ合って楽しんだ。また、11月初めに行われる「ロイクラトン」（灯籠流し）を扱った際は、学校に生えているバナナの幹と葉を使って、タイのスタッフさんにクラトン（灯籠）の作り方を教えてもらった。その後、大きなビニールプールを用意し、それぞれが作ったクラトンを浮かべて、鑑賞した。いずれの行事にも、タイのスタッフさん（用務員さん）にも参加してもらい、体験活動ができたことがよかった。



クラトン（灯籠）を鑑賞している様子

また、栽培活動では、日本でもよく栽培するキュウリやオクラに加えて、タイ料理に使われる空心菜（パックブン）や丸ナス（マクワポ）等の栽培も行った。また、タイのスタッフさんが学校の裏などでバナナを栽培しているのを目にしたことから、苗を分けてもらい、栽培活動に加えた。1年目の10月に植えた苗木から、2年目の3月にはバナナが収穫でき、子どもたちと共に味わうことができた。バンコクでは至る所にバナナが生えており、日本でもよく食していたとても身近な果物だが、バナナがどのように成長し、つぼみをつけ、そこからどのように実になって、収穫まで至るかは、まったく知らなかった。子どもたちにとっても、バンコクで学んだからこそ得られた貴重な経験となったことと思う。



バナナのつぼみを観察する児童

その他、コロナ禍に整備されたオンライン授業のノウハウを生かし、日本の特別支援学級とのオンライン交流も複数回行うことができた。前述した通り、なかよし学級に在籍する児童の中にはタイに住んでいることを否定的に捉えている面も見られたことから、「タイのよさを伝えよう」という単元を立ち上げた。子どもたちは、タイのよいところについて話し合ったり、調べてまとめたりする過程で、タイのよさに気付いたり、改めて感じたりする様子が見られた。また、日本に住む同世代に伝え、認められることで、日本ではできない貴重な体験をしているという思いや誇りをもつ様子も見られた。

③ APCD校外学習の様子

なかよし学級は、アジア太平洋障害者センター（APCD: Asia-Pacific Development Center on Disability）での校外学習を、2016年から始めており、私は2021年から3年連続で参加した。

APCDは、アジア太平洋地域の障害者の地位向上を目的としたタイ王室が後援する財団であり、タイ政府と日本政府・JICAの協力により2002年に設立された。また、JICA技術協力プロジェクトや日・ASEAN統合基金（JAIF）等による支援を活用しながら、障害者団体・リーダーの育成、地域ネットワークの構築、バリアフリー社会の構築に力を入れており、国際協力を志す日本人大学生の研修グループやインターンシップ、青年海外協力隊等も広く受け入れている施設である。

2021年度に校外学習の打ち合わせで初訪問した際、出迎えてくださったタイスタッフの女性の1人が、ご自身が自閉症であることを教えて下さった。また、男性スタッフは、喋り方や四肢の動きから脳性麻痺をもっているということが伺われた。加えて、校外学習当日のセレモニーで司会をしていた女性は、両手がなく、子どもたちのインタビューに答えてくださった方は全盲であった。そして、お1人お1人が自分の得意なことを生かしながら、仕事に誇りをもち、生き生きと働かれていることに感銘を受けた。

このAPCD校外学習では、パン作り体験と工場見学、工場職員へのインタビュー、そして工場で作ったパンを売っている店舗での買い物学習を行っていた。日本に比べて、在外教育施設では地域での体験活動の制限が多い中、とても貴重な体験をすることができた。また、職業体験や買い物学習という体験に加えて、タイの方々の温かさに触れられる機会にもなっていた。

④ 一般学級や教職員へのなかよし学級についての啓発活動

バンコク日本人学校には、タイにルーツをもつ児童生徒や他の国での生活経験のある児童生徒などが多いこと、また日本から来た児童生徒も、全国各地から集まってくるため、言葉（方言）や習慣の違い等があって当たり前で、多様性に寛容な雰囲気があった。しかし、そんな環境にあっても、なかよし学級への偏見が生じてしまうことがあった。主には、日本においてもしばしば課題となっていたが、特別支援学級は、「勉強ができない子が行かされる場所」「変な子がいる場所」というようなものである。

そこで、なかよし学級を、個々に応じた多様な学びの場の一つとして理解してもらうため、1年目には担当した児童の交流学級において、2年目には全交流学級に加え、1年生全クラスにおいて、3年目には、学校だよりを通して全校の保護者に向けて、なかよし学級についての説明を行った。また、多くの新卒教員を含む学校採用職員や全国各地から集まってくる教職員に対しても、なかよし学級についての説明を、児童や保護者に向けて行うものと同様に行うことで、共通理解に努めた。



なかよし学級の説明で使用したスライド

(2) 特別支援教育コーディネーターとしての実践

① 編入学児童生徒の対応

バンコク日本人学校での特別支援教育コーディネーターの中心となる仕事は、毎学期ごとにやってくる100名以上の児童生徒が、スムーズに学校生活に適應できるように準備することであった。そのために、膨大な編入受付データに目を通して、保護者とメールや電話でやりとりしたり、必要に応じて事前面談をして、必要な支援について調整したり、適切な就学場所を検討したりした。

日本国内であれば、個別の配慮を必要とする児童が増えれば、特別支援教育支援員制度を利用して、支援員を補充して対応したり、特別支援学級の児童が定員オーバーとなれば、年度途中であっても、教員が追

加されたりなどして、体制を整えることができる。しかし、在外教育施設では、支援員制度は利用できない上、年度途中での職員の加配は難しく、年度当初の職員配置の中でいかに学校運営をしていくかが重要となる。そういう意味で、編入生の支援の必要性を事前に知り、通常の学級であれば、どの学級であれば対応可能か検討したり、特別支援学級入級の必要性を検討したりすることに力を入れていた。一番不幸なのは、編入後に不適應を起こして登校できなくなってしまうケースである。国内と違い、学校外の支援機関がほとんどないため、学校に来られなくなると母子ともに孤立してしまうことが懸念される。そうした危険性を減らせるように、事前の保護者アンケートを実施したり、時には在籍校に問い合わせを行ったりして、配慮の必要性について、可能な限り情報を収集するようにしていた。

## ② バンコクの幼稚園や保育園との連携強化

新入学児童についての情報は、バンコクの幼稚園や保育園に直接観察に行き、個別の配慮が必要な児童についての情報を得られるようにした。また、バンコク日本人学校の特別支援教育体制についても園側と情報共有を行い、現状を理解してもらえるように努めた。

## ③ 病院との連携

国内では、発達に課題が見られる児童生徒については、特別支援教育センターを紹介したり、療育センターや特別支援学校のセンター的機能を利用して相談したり、様々な外部機関との連携をしながら特別支援教育を行っていた。しかし、バンコクにはそうした公的機関はないことから、一般のタイの病院との連携が不可欠となっていた。中でも、唯一の日本人の言語聴覚士が勤務している大きな病院と連携を密にしていた。病院から、診察した児童の学校適応に関する質問紙の依頼が、保護者を通じて届くことがあり、その質問紙の扱いについて病院側と取り決めをしたり、タイで処方できる発達障害に関する薬についての情報をもらったりと、有意義な連携ができた。

## ④ 合理的配慮についての整備

2024年4月から国内では民間事業者にも義務化されるという合理的配慮について、バンコク日本人学校としての対応指針を作成したり、教職員への研修を行ったりした。また、読むことに課題のある児童生徒のためのデージー教科書の導入やルビ付きテストの購入（理科と社会はすべてルビ付きテストを購入）、聴覚過敏の児童生徒へのイヤーマフの貸し出しなど、基礎的環境整備も含めた、合理的配慮にかかわる体制を整えることに努めた。

## ⑤ 不登校支援と通級指導

その他、不登校支援として、2024年度2学期より開設した「ふれあいルーム」での支援の一部を担当した。以前は専任の教員が配置されて運営されていたものの、様々な理由により廃止されたが、必要とする児童生徒の増加により、専任の教員配置はないが、生徒指導専任や特別支援教育コーディネーターが中心となり、再開されることとなった。また、通級指導については、以前より学校カウンセラーと特別支援教育コーディネーターが行っており、私も10名ほどを担当した。主に小集団でのソーシャルスキルトレーニングと個別の学習支援を行っていた。国内での通級指導教室に比べると、決して十分とは言えない状況であった。

## ⑥ 特別支援教育進路説明会の実施

配慮を要する児童生徒の進路については、現在様々な選択肢があり、都道府県によっても大きく違っている。また、療育手帳の有無によっても、進路や就労についての選択肢が異なるため、保護者にとってお子さん

の将来の自立に向けた見通しをもっておくことが大きな心の支えになると感じている。国内であれば、それらの情報を得られる機会がたくさんあるが、バンコクではWebなどの情報に限られていたため、通常の学級の保護者も含め希望者に向けて、特別支援に関わる進路説明会を実施した。2023年度の職員の中に、特別支援学校高等部経験者、高等特別支援学校経験者がいたからこそ、充実した進路説明会が実現した。

### 3 おわりに

バンコク日本人学校の特別支援学級は、2024年度より中学部にも1学級が開設され、小学部は1学級増え、4学級となった。教室も通常の学級と同じ広さとなり、学習環境がさらに充実した。これは、国内同様、在外教育施設においても特別支援教育に対するニーズが増加していることの表れだと思う。一方、インクルーシブ教育を推進する世界的な流れもあり、特別支援学級を増やすことが必ずしもよいとは言えない面もあるだろう。また、配慮を要する児童生徒の将来の自立を考えた場合、日本のより充実した特別支援教育の下で、地域の福祉・医療サービスや地域社会とつながりを築きながら生活していくことに勝ることはないと思っている。しかし、配慮を要する児童生徒についての関心が高まり、彼らが日本国内はもちろん、在外教育施設においても安心して学べる環境が整い、選択肢が増えていくことは、大変喜ばしいことである。

在外教育施設では、特別支援教育の専門性や経験が必要とされており、やれることはまだまだたくさんあることを、私はこの3年間で実感した。私がWebの情報から海外赴任を決意したように、この実践記録が誰かの思いにつながっていけば幸いである。